

55歳のつぶやき

在京飯田高校同窓会の幹事学年は55歳。今年は高39回生が担当します。働き盛りの中、そろそろ自らのゴールを描き始める年代。同窓生たちはどんなことを考えているのでしょうか。

高39回生から

■高次脳機能障害の夫と共に

2015年4月祝日、米原警察署から突然に電話が入った。伊吹山へトレイルランに出かけた夫が、心肺停止で倒れている所を発見され、ドクターヘリで赤十字病院に運ばれたと言うのだ。幸い夫は命を取り留め徐々に回復し、リハビリを経て8か月後に退院したが、脳に障害が残り、生活全般にフォローが必要になった。

夫とは大学で知り合い、私が大学院を卒業して化学メーカー就職後に結婚した。研究所の仕事は面白く、職場環境にも恵まれ、筑波→横浜の転勤を挟みつつ、産育休を経て2人の子供を共働きで育てた。夫が倒れた当時、子供は高1と小6。無論私は働かねばならず、平日は隣市に住む夫の両親が、休日は私が夫の面倒を見た。家族皆、大変な日々であった。3年前に会社を早期退職し、今は比較的ゆったりと近所の

パートと介護で過ごしている。息子は自立して隣市に住み、娘は名古屋で学生を謳歌している。遠くへはなかなか出かけられないが、年に一度、帰省し父の墓参りをして母と弟家族に会い、美しいアルプスを眺めることを楽しみにしている。

● 竹内佐千江（旧姓・関川） 高森町出身 横浜市在住

■ I feel it's nice to be 50. I say it's fine to be 60.

4月。この春大学に進学して一人暮らしを始めた長男の部屋を掃除していたら、「両親へ」と書かれた封筒を見つけた。短い手紙が入っており「これまで育ててくれてありがとう。……」むむ、。読み進めると「これから大学に行くまでまだまだ迷惑をかけるけど、よろしくお願いします」よく見れば確かにこれは小学生の字だ。どうやら小学校卒業時に学校で書かされ、渡せず塩漬けとなっていたものらしい。少し頼りなげな字面の裏に垣間見える彼の控え目な性格。しばし掃除の手を止め、18年間の様々な思いとともに感慨にふける。

世の中はデジタル化し、とても便利で楽しみも多様化したけれど、心に深く響くのはアナログで素朴な一言。多分、生命を感じる瞬間。I feel it's nice to be 50. I say it's fine to be 60. その時なぜかこの歌詞が思い出された。4月の爽快な風のごとく、フクザツな世界でシンブルに生きていきたい。

● 北沢佳月 上郷出身 O A 機器会社サイバーセキュリティ保証部門勤務

■前に進むこと

今年は大河ドラマ「光る君へ」を見ている。少女漫画や韓流を彷彿させるとされる恋愛劇はさておき、興味深いのは陣定の場面である。前例を見ない案件に「前例にございません」「前例があれば」等の発言が続く。他にも中宮定子が古い前例を見つけてくるシーンも。約1000年を経た現在においても行政界限では「前例はあるのか」「過去の事例」「お仲間はいらっしゃるか」「現在の事例」が、新たな行動の判断材料として存在するわけで、後ろと横を確認してやっとな前を見ることができると言える。

過去にとらわれず、新しいことを取り入れていけばと思いつつ、何か叱責を受けたりすると「前と同じことやっているのに、何故？」と都合良く前例主義を採用してしまうのも現実。とは言え、新しいことをしたから例ができるのであり、前例が築かれた過去は尊重しつつ、将来への一歩を踏み出すべく、常に新しい発想は持つようにしておきたいと思うこの頃である。

● 湯澤将憲 座光寺出身 国家公務員

■55歳というけれど…

高校卒業後喬木村を出て、大学進学後、引越しは17回、暮らした地域は海外2都市含め12か所。中国と米国の大学に留学を経験、仕事も素材業界から30歳前に食品業界に転じるなど、刺激と変化に富んだ人生を歩みましたが、現在は川崎市に腰を落ち着きました。一方で54歳で会社を創業、国内及び海外を飛び回る日々なので老後を考えている余裕がありません。米国と中国という大國で生活した経験から、今は「細かいことは気にせずにやりたいことは全部やる」を人生訓に、衰えつつある身体の健康に気を配りつつ、悔いを残さない人生を意識しています。

気分転換は高校時代のラグビーではなく、専らプロ野球であり最良の楽天主イギリスの試合を年間約30試合観戦です。強くないのでここでストレスがたまるのが難点です。最近久しぶりに農園を借り野菜栽培を始めました。子供も独立する時期となり、暫くは野菜の成長が日々の楽しみになりそうです。

● 市瀬博雄 喬木村出身 会社経営

■単身赴任先で気づいたこと

就職して今年の4月でちょうど30年。そんな節目の年に地方への転勤が決まり、単身赴任を始めることになった。一人暮らしは独身時代以来23年ぶりである。新しい生活の中で、ふと若い頃の自分と比較して生活習慣に劇的な変化があることに気づいた。元来私は部屋の掃除や整理整頓などが大の苦手で、布団など干したこともなかった。ところが単身赴任先では、掃除や洗濯を怠らず、さらにはホームセンターや100円ショップで収納用品を買い揃え、部屋の整理整頓に日々腐心しているのだ。

この変化の原因は家族との生活にあるのではない。か。だらしなないことに対して妻からの厳しい指導を受けてきたこと、子育てに際して住居を清潔に保つこと、さらには子供の手本となる必要もあったことによって、いつのまにか生活習慣が改善されたのだと思う。

この年になっての思わぬ進歩に気づいた今、家族への感謝の気持ちが一層深まった。単身赴任先から自宅に帰るときには、ささやかな感謝の気持ちとして地元の名産品を持ち帰りたい。

● 金田 功 鼎出身 製造業会社員

■変化を楽しむ

振り返れば、望むと望まざるにかかわらず、ほぼ7年周期で職場環境を変えている。自分が飽きっぽいのか、幼少から引越しが多かったからなのかはわからないが、おかげで貴重な経験ができています。起業も廃業も経験することができ、今となつては厳しい時期こそ良い思い出になっている。

55歳になった自分は、意外と自由で捨てたものではない。保護者として、社会人として背負うものが軽くなつて、いろいろな変化に挑戦できるチャンスでもある。保守的で変化を拒む老害にならず、スピード感を持って無理矢理にでも変化に挑戦し受け入れていくのが、今後の自分のテーマかなと思う。人生は短いのだから。また、閉塞感の強い日本では、AIやロボットなどテクノロジーや新たな制度を積極的に受け入れていくべきなのは私たちの世代なのでは？とも思う。

この度、ここに投稿する機会を得て、偉そうに目標を整理できたことに感謝しています。

● 橋都 亨 上郷出身 金融コンサルタント

■将来の夢

幼少期「テレビCMにでてみたいな」と思っていたことがあった。高校生クイズ予選に応募し、返信された封書のマスケットを見てワクワク感が止まらず、「こんな会社で働いてみたいな」ってことも。高3の最終三者面談で「やっぱ医学部へ行きたい」と急な進路変更するも、足切をくらい1校も受験できないまま浪人生へ。翌年から三重県での大学生活を経て東京女子医大で働いていたが、教授から「医局人事を断ること、分かるな？」と、産業界として日本テレビへ異例の出向となった。故氏家会長の入院担当をしたことが多少影響したと思う。8年間日本テレビ社員として勤務したのち、汐留に医院開業。2年前、なぜかケーブルテレビの健康食品のCMに出演し、3か月間放送された。些細なギャラもあった。次の夢は「本の出版」「飯田の地域医療協力」「上場会社社長になる」。かなうような気がしてハードルを上げたが、実は難しそうだ。

● 伊原 俊一 飯田東中出身
内科開業医 合同会社東京優春サービス（設立準備中）代表

■これからの人生を妄想中

長男の出産を機に無職になりましたが、「主婦」でいることが居心地悪く、とりあえず契約社員の仕事を見つけてきました。それが現在従事しているフオワダーという職種です。

横文字でかつこいですが、平たくいえば国際運送会社。最初は事務職からスタートし、業界内で転職を経て自然に営業マンになりました。さすが外資系。起業家精神という名の放置プレーなので、孤立無援。黙っていると損をする。留学経験のない私は、なんちゃって英語で苦労している一方、海外出張を自分で計画し、余暇には美術館巡りをしたり、アメフト観戦したりとこっそり楽しいこともしています。

2人の息子も手が掛からなくなりました。家事をこなしてくれるドイツ人の夫に感謝！ これからの人生、夫と1〜2か月海外のどこかで暮らす生活もいいかなと思いつつ、サラリーマン卒業後は日本のために何か貢献したいと妄想している今日この頃です。

● シュトゥールマン 亨子（旧姓・安江）
飯田西中出身 外資系企業勤務